

# 純粹直観の働きとは何か

——カントの空間論に即して——

北岡 崇

## 一、序

『純粹理性批判』原理論の第一部門は「超越論的感性論」(以下、感性論と記す)である。『純粹理性批判』原理論とは、対象認識のためのア・プリオリな表象を発見し、そのような表象の「原理」・「源泉」を含みものとして「純粹理性」を解明しかつ定立しようとする思索の成果である。この思索は、理性による「純粹理性」の解明という構造をもつが故に、理性の「自己認識」として遂行される。しかもその思索は、対象認識のためのア・プリオリな表象の「原理」・「源泉」の解明に携わることが故に、「超越論的」と称されるべきものである。このような思索の成果である『純粹理性批判』原理論に感性論が所属するということは、感性論が、「超越論的批判」として遂行される理性の「自己認識」の一環として位置づけられていることを意味する。実際に、感性論は、対象認識のためのア・プリオリな表象を発見し、その表象の「原理」・「源泉」を含みものとして感性という能力を定立する記述の中で、「純粹理性」

を感性という側面から解明しようとしているのである。

その感性論の末尾に、「超越論的感性論の結び」という標題を付された短い段落がある。感性論における思索の成果を要約するその箇所、カントは述べている……。

「さて、この超越論的感性論においてわれわれは、いかにしてア・プリオリな総合的諸命題は可能であるかという超越論的哲学の一般的な課題を解決するために必要な諸要件の一つを得たわけである。それは、ア・プリオリな純粹直観、すなわち空間と時間である」。

感性論は、空間及び時間をめぐる思索の中で展開された。カントは、そこで、空間及び時間を対象認識成立のために不可欠な「ア・プリオリな純粹直観」として論証することによって、そのようなア・プリオリな表象の「原理」・「源泉」を含みもの感性という能力を定立しえたと考えて右のように述べているのである。

とはいえ、感能力の定立に至るまでの彼の思索を、空間及び時間についての彼の記述に沿って追跡するという作業は、決して容易なものではない。実際に、感性論の成果を要約する語句、つまり「ア・プリオリな純粹直観、すなわち空間と時間」という語句とし

ではこの上なく簡潔な語句であっても、その意味をコンテキストに即して十分に把握しようと試みる時、われわれは、自ら困難な状況に取り囲まれるのを幾度も自覚することになるのである。われわれの試みを困難なものとする事情として、感性論全体の中で占める空間概念及び時間概念の「形而上学的解明」の位置の解釈にまつわる問題がある。また、『純粹理性批判』において最も基本的なクラス(14)の術語に属する「直観」・「対象」・「概念」などの術語でさえ多義性を免れていないという事実がある。更に、感性に固有の働きをその純然たる姿において把握するためには、感性論を読むだけでは十分ではないという事情がある。しかし、カントの思索の追跡を困難なものとするこれら三つの事情はすべて、それらに共通の一つの根底をもつ。それは、カントの思索が理性の「自己認識」として遂行されているということである。理性の「自己認識」という思索に固有の難解さがテキスト解釈のすべての困難さの根底に存しているのである。

しかし、テキスト解釈の困難さの在処を一つ一つ確定しながら当該箇所の意味を正確に解き明かしてゆくことができると思えば、それは、とりもなおさず、そのテキストに記録された思索を追跡する歩みをそのつど進展させているということを意味する。本稿は、主として空間概念の「形而上学的解明」、特にその第三及び第四論証に注目しつつ、しかし同時に批判期カントの空間論全般にも目を配りながら、カントが感性に固有と考えた働き、すなわち純粹直観の働きとは何であるかという問いに答えようとする試論である。感性論末尾に見られた「ア・プリアリな純粹直観、すなわち空間と時間」という語句に託された意味内容も、以下の論述をとおしてはじめて十分に把握されることになるだろう。

## 二、「形而上学的解明」の位置づけ

空間概念の「形而上学的解明」の項は、四つの論証と四つの論証全体に対する前置きの部分とから成る。四つの論証は、前置きの部分で提起されている空間及び時間の本質を問う問い、すなわち「さて、空間と時間とは何であるか」という問いに答えるものである。これら四つの論証をもって、感性論における空間をめぐる思索が開始される。そして通常、これら四つの論証のうちまず最初の二つの論証によって空間のア・プリアリ性が、続いて後の二つの論証によって空間の直観性が示されると解釈される。

第一及び第二論証において、空間は、「外的経験から抽象された経験的概念ではなく」、外的経験を可能ならしめる表象として、「すべての外的直観の根底に存する一つのア・プリアリな必然的表象」であるということが論証される。この意味でのア・プリアリ性を論証された空間が更に直観性をもつことを、続く二つの論証が明らかにしようとする。第三及び第四論証の結論部分はそれぞれ次のようなものである。

「空間は、諸物一般の諸関係についてのいかなる論弁的概念、あるいは、よく言われるように、一般的概念でもなく、一つの純粹直観である」。

「……空間についての根源的な表象はア・プリアリな直観であって、概念ではない」。

しかし、四つの論証の意図が、空間をア・プリアリな純粹直観として示すことにあるとすれば（時間についても、空間についてもほぼ同様の論証がなされている限り）、空間概念と時間概念の「形而

上学的解明」さえ完了すればすでにその時に感性論全体の成果が獲得されていることになるのであろうか。確かに、その時すでに、「ア・プリアリな純粹直観、すなわち空間と時間」の発見がなされているように思えるのである。だが、この点で、空間論は、複雑な様相を呈している。

「形而上学的解明」の四つの論証の箇所感性論の思索の中核部分が存在することは確かである。しかし、すでにその箇所純粹直観の働きがそれとして純粹にそれだけで明示されているわけではないし、ましてや、そのような働きにおいておのれの存在を証示する感性という能力が明示されているわけでもない。ところが、「ア・プリアリな純粹直観、すなわち空間と時間」の発見は、これが感性論全体の「結び」において語られる限り、それ自身、対象認識のためのア・プリアリな能力として感性の存することを証明する力を有していなければならない。そして、このような証明力をもつためには、その発見は、ア・プリアリな純粹直観の働きそのものの発見でなければならない。つまり、感性論全体の成果として「ア・プリアリな純粹直観、すなわち空間と時間」の発見が語られる時、その空間と時間に即して、ア・プリアリな純粹直観の働きが洞察されていなければならないのである。この条件が満たされていなければ、感性論は、感性というア・プリアリな能力を定立する論理として成立しえず、それ故『純粹理性批判』原理論に所属できないこととなる。<sup>(23)</sup>

しかし、空間や時間を、だちに、ア・プリアリな純粹直観の働きと見ることは不可能である。事実カントの空間論の場合も、その「形而上学的解明」の四つの論証の中では、空間が対象を認識するア・プリアリな純粹直観の働きであると明言されてはいない。空間概念の解明が進められる中で、空間がはじめて働きとして語られるの

は、「形而上学的解明」に続く「超越論的解明」において「形式」という術語が用いられる時である。<sup>(25)</sup> その箇所空間が触発を俟って「客体の直接的表象、すなわち直観を得る主観の形式的性質」・「外的感官一般の形式」であるとされる時はじめて、空間は、触発を介して認識の対象が与えられるに際してその対象を規定するア・プリアリな純粹直観の働きであるということが語られるのである。<sup>(26)</sup> とはいえ、奇妙なことに、特に「超越論的解明」の中で、空間を、認識の対象を規定する「外的感官一般の形式」、すなわち対象認識のためのア・プリアリな純粹直観の働きとして捉えるための新しい論拠が提示されているわけではない。むしろ、「超越論的解明」では、『純粹理性批判』緒論に見られる思想、つまり、ア・プリアリな表象はア・プリアリな認識能力にもとづくものであるが故にア・プリアリな認識能力の存立を指し示すとする思想<sup>(27)</sup>を、ア・プリアリ性と直観性とを所有するとされた（「形而上学的解明」で）空間の表象の場合<sup>(28)</sup>に適用して、空間を「外的感官一般の形式」と呼んでいるにすぎないのである。しかし、その緒論に見られる思想そのものが、ただ単に話を進めるための、それ自身確実であることの明示されていない原則にすぎないというのではないとするなら、当該のア・プリアリな表象そのものに即して、その表象の「原理」・「源泉」となっているア・プリアリな認識能力の働きが洞察されていなければならない。従って、空間が感性にもとづくものとして捉えられるためには、空間そのものに即して感性の働きが洞察されていなければならない。表象のア・プリアリ性からその表象を「供給する」ア・プリアリな能力への推理を支えるものとして、ア・プリアリ性をもつ表象に即してそれを「供給する」能力の働きを見る洞察が存していなければならない。そして、この洞察の内容を見過ぐすなら、感性論

のテキストを読み進めたとしても、得体の知れぬ原則の妥当性を黙認した上でその原則の適用の結果を知らされるにとどまり、カントの思索の歩み、つまりカントの論理を十分に追跡したことにはならないであろう。

われわれは、カントの空間論の思索の中核部分は「形而上学的解明」の四つの論証へと集約されると解釈する。「超越論的解明」ではじめて空間が、認識の対象を規定する働き、つまり「形式」として語られるのであるが、その働きの発見が「超越論的解明」によってなされているわけではない。むしろその発見は、「形而上学的解明」においてなされている、と解釈できるのではないだろうか。そして、このような解釈の成否は、ひとえに、ア・プリオリ性と直観性の論証が試みられている空間に即して、ア・プリオリな純粹直観の働き、つまり直観の「形式」を把握することができるか否かにかかっている。<sup>(30)</sup>

### 三、直観性の論証

「形而上学的解明」の第一及び第二論証において、空間のア・プリオリ性が論証されている。そのア・プリオリ性とは、「すべての外的直観の根底に存する」という意味でのア・プリオリ性、すなわち「外的な諸現象の根底に必然的に存する」という意味でのア・プリオリ性である。<sup>(31)</sup>換言すれば、「人は、空間の内にかなる対象も見い出されないということなら十分に考えることができる」が、何らかの「外的直観」・「外的現象」・「外的経験」<sup>(32)</sup>を考えようとすれば、その時同時に空間を考えないわけにはゆかないという点に示されるア・プリオリ性である。<sup>(33)</sup>このようなア・プリオリ性を論証さ

れた空間が更に直観性をもつことを、第三及び第四論証が明らかにしようとする。

第三論証によれば、空間は本来「唯一なる」ものである。<sup>(34)</sup>われわれは確かに「多くの」諸空間について語ることがあるが、それは、それら「多くの」諸空間が「唯一なる」空間の諸部分と解されている場合のみのことである。<sup>(35)</sup>しかしまた、「唯一なる」空間が諸部分をもつからといって、その「唯一なる」空間は、個々のそれら諸部分空間から合成された(zusammengesetzt)ものであると理解されてはならない。それら諸部分空間は「唯一なる」空間の「諸構成部分(Bestandteile)」ではなく、「唯一なる」空間は個々の諸空間からの「合成体(Kompositum)」ではなく、むしろ「全体(Totum)」と名づけられるべきものである。<sup>(37)</sup>そして「多くの」諸空間は、このような全体的な「唯一なる」空間の「諸制限(Einschränkungen)」<sup>(38)</sup>にもとづくと考えられるべきである。ハイデガーが述べるように、「各々の空間部分は、第一にそれ自身すでに空間であり、第二に空間の内であり、そして第三に、各々の空間部分を空間部分とする諸限界は空間の内に入れ込みそれ自身空間的である」ため、「個々の諸空間はその本質上、空間的に限界づけられた内空間的なものである」<sup>(39)</sup>からである。

確かに、空間についてのこのような思索は、空間が「論弁的概念、あるいは……一般的概念」ではない<sup>(40)</sup>ということを、空間における部分と全体との関わり方の特性に注目しつつ、概念の外延と内包の両面に即して論証している<sup>(41)</sup>と言える。

例として「樹木」の概念をとってみよう。まず、その外延に即して語るなら、「樹木」の概念は、すべての種の「樹木」や、あれ、これと指示されうるあらゆる個体としての「樹木」を「自己の下に

(unter sich)「包摂するが、それらを「自己の内」に(in sich)もつことはない。<sup>(41)</sup>しかし、空間は、諸部分空間をすべて「自己の内」にもつ。次に内包に即して語るなら、「樹木」の概念は、「樹木の概念を形成する「諸メルクマール」すなわち「諸構成部分(Bestandteile)」から合成されて(zusammengesetzt)いる。それ故、概念の場合、部分が「先行する」<sup>(42)</sup>と言ふことも可能であろう。しかし、空間の場合、部分は「空間の内」<sup>(43)</sup>あつてはじめて可能であり、全体的な「唯一なる」空間の「制限」によってはじめて得られる。この相違を意識しながらカントは、空間の諸部分について述べている……。

「また、これら諸部分は、唯一にしてすべてを包括する空間のいわば諸構成部分(それからこの空間の合成(Zusammensetzung)が可能であるような)として、この空間に先行することはできない。」<sup>(44)</sup>  
 「論弁的概念、あるいは……一般的概念」であるなら具えていなければならぬ、外延と内包に即しての二つの性格が、空間には認められないのであるから、空間は「論弁的概念、あるいは……一般的概念」ではありえない。しかし、カントが第三論証で引き出す結論は、このような否定的な内容のみから成り立つのではない。カントは、空間を、それには概念を特徴づける二つの性格とは異なる、これらとは対照的な上述の性格が具わるといふ理由にもとづいて、積極的に「直観」と呼んでいる。つまり、カントによれば、空間は、その全体が部分に「先行」し、諸部分はその全体の「内」でのみ可能であるという性格、一言で語るなら「本質的に唯一(wesentlich einzig)」であるという性格をもつが故に、「直観」である。しかもここでは、空間は、「形而上学的解明」の先立つ第一及び第二論証におけるア・プリアリ性の論証を受けて、「純粹直観」であ

るとされるのである。空間がア・プリアリ性を所有する以上、空間をそれ自身として見れば、確かにそれは「純粹」であると言ふことができるであろう。<sup>(45)</sup>

さて、「本質的に唯一」という空間の性格は、第四論証において論証を進めるための論拠となる空間の性格、すなわち無限性という性格を、すでに潜在的に内含している。というのは、いかに大きな空間を考えようともその限界と大きさを特定された空間は、すべて、全体的な「唯一なる」空間の部分にすぎないということになれば、その全体的な「唯一なる」空間そのものは、一切の限界の彼方へと更に広がる空間でなければならぬからである。この意味において、「本質的に唯一」なる空間は無限性を具えていなければならぬ。<sup>(46)</sup> 第四論証の冒頭で、カントは、「空間は無限の与えられた大きさとして表象される」と述べている。そして、この「無限の……大きさ」としての空間は「自己の内」無数の諸空間をもつことができるが、概念であるなら、たとえそれが無数の諸表象の「共通のメルクマール」として「自己の下」にそれら諸表象を包摂すること<sup>(47)</sup>はあるにせよ、それら諸表象を「自己の内」もつことはない。この相違にもとづいて、かつ先になされた空間のア・プリアリ性の論証を受けて、カントは、「それ故、空間についての根源的な表象はア・プリアリな直観であつて、概念ではない」と結論し、第四論証をしめくくる。

以上見たように、空間は、概念には認めることのできない二つの性格、「本質的に唯一」・「無限の……大きさ」を具えるが故に概念ではなく「直観」であると推理されている。ところが、それら二つの性格は前者が後者を内含するという関係に立つのであるから、つまりとところ第三及び第四論証では、空間の直観性は、空間に具わ

る「本質的に唯一」という性格にもとづいて推理されている、と言える。しかしながら、「本質的に唯一」という空間の性格と空間の直観性との関係はそれほど明らかなものではない。そもそも、この「本質的に唯一」という空間の性格は、本当にそれだけですでに、空間が「直観」であることを論証する十分な論拠であると言えるのだろうか。あるいはまた、たとえ、「本質的に唯一」なる空間は「直観」であると言えることができるとしても、その時、「直観」という術語はどのような意味で用いられているのか。

#### 四、唯一性と直観性

まず、「本質的に唯一」という性格と直観性との関係についてのカントの思想を確認したいと思う。空間概念の「形而上学的解明」の第三論証に対応する、時間概念の「形而上学的解明」の論証の中の次の箇所注目しよう。

「さまざまな諸時間はまさに同一の時間の諸部分であるにすぎない。しかし、たった一つの対象をおしてのみ与えられうる表象は直観である」。

この引用箇所で「たった一つの対象」と呼ばれているのは、「同一の」、あるいは空間の性格を表現する際のカントの語句を用いるなら「本質的に唯一」なる時間のことである。時間は、元来「本質的に唯一」かつ「同一の」「たった一つの」ものとしてしか表象されえないが故に、「直観」であるというわけである。

前節で、空間の場合も、その「本質的に唯一」という性格からその直観性へと推理されていると述べたが、実は空間の場合、その推理は、右に述べた時間の場合ほどはっきりとは語られていない。し

かし、語り方に相違があるとはいえ、空間の場合もその推理がなされていることは確かである。またこのことは、空間概念の「形而上学的解明」と時間概念の「形而上学的解明」とがほぼ同様の論証によって進められているということから推測されることでもある。そしてこの推測は、『可感界と可想界との形式と原理』に見られる次の記述によってあらためて支持されることになる。

「空間の概念は、すべてのものを自己の内に、(in se) 包含する個別的表象 (singularis representatio) であり、自己の下に (sub se) 包摂する抽象的かつ共通な思念ではない。……それ故、空間の概念は純粋直観である。それは、……個別概念 (conceptus singularis) だからである」。

ここには、空間はすべての部分を「自己の内に」包含するそれ自身「個別的」な表象であるが故に「直観」であるという推理、すなわち、空間の「本質的に唯一」という性格から空間が「直観」であるということへの推理が見られる。ここにおいても、本節冒頭近くで時間概念の「形而上学的解明」から引用した箇所においても、カントは、同様の推理を、しかもその推理の妥当性にわずかでも疑いを抱く気配なく、遂行している。カントは、その推理の妥当性を自明視している。

しかし、その推理は、本当に妥当なものであろうか。また、もしもその推理が妥当なものであるとするなら、そこで結論される直観性とはどのようなものであるのか。われわれは、空間の直観性への推理を、『純粹理性批判』の感性論の冒頭に示された「直観」の説明と考え合わせる時、これらの問いを立てざるをえなくなる。その「直観」の説明とは次のようなものであった。

「……認識がそれをおして対象と直接に関係するところのも

の、だからすべての思惟がそれを手段としてめざすところのものは、直観である」。

この説明によれば、直観性とは、対象に対する認識の直接性のことである。そして、そのような直接性をもつ認識作用であるなら、すなわち直観の働きであるなら、「個別的」な対象に適中すると言えよう。直観の働きであるなら、これは思惟の働きとは区別されねばならない。思惟の働きとは、これと指示されぬ少なくとも可能的には不特定多数の対象に、それらの対象に共通のメルクマールを介して関係する働きであるからである。従ってカントは、「直観は対象に直接関係し、個別的である。概念は多くの諸物に共通でありうる一つのメルクマールを介して間接に対象と関係する」とも述べている。確かに、直観の働きが適中する対象が「個別的」であるということ、これと指示することのできる「唯一なる」ものであるということなら認めることができる。それ故、直観されているもの、という意味での「直観」は「個別的」で「唯一なる」ものであると言いうる。しかし、だからといって、逆に、「個別的」で「唯一なる」ものをただちに「直観」（直観されているもの）であると言ふことはできない。『純粹理性批判』に即して例を挙げるなら、カントが「最も実在的な存在者 (ens realissimum)」ないし「すべての実在性の総括」と呼ぶものもまた、「一個の個別的な存在者 (ein einzelnes Wesen)」である。そしてその表象は、「単にすべての述語をその超越論的内容の面で自己の下に、(unter sich) 包括する概念ではなく、それらを自己の内、(in sich) 包括する概念である」。

また、「各々の物のあまねき規定はこうした実在性の全体の制限 (Einschränkung) にのみ」従って、この「一個の個別的な存在者 (ein einzelnes Wesen)」は、「空間と同様、その全体

が部分に「先行」し、諸部分はその全体の「内」でのみ可能であるという性格、すなわち「本質的に唯一 (wesentlich einzig)」であるという性格をもつ。しかし、だからといって、カントは、「その「本質的に唯一」なる「一個の個別的な存在者」を「直観」（直観されているもの）と呼ぶことはない。直観の働きがその「超越論的理想」に直接適中しつつそれを「個別的」に表象するということがありえないと、カントは考えるからである。直観されているものは唯一性をもつという意味において、直観性から唯一性への推理は妥当であるが、唯一性から直観性への推理は、『純粹理性批判』そのものにおいても、一般に妥当する推理とは認められていないのである。であるにもかかわらず、先に見たように、カントは、「本質的に唯一」という空間の性格から空間の直観性へといささかもたためらうことなく推理していた。恐らくカントは、「本質的に唯一」という空間の性格の中に、直観されているものもつ唯一性を見ていたのである。すなわち、「本質的に唯一」という性格から直観性へのカントの推理を支えるものとして、直観性から唯一性への推理が存しているのである。そして、もしもこの解釈が正しければ、空間概念の「形而上学的解明」の積極的な結論として、空間が「純粹直観」であると語られる時、「純粹直観」とは直観されている純粹な表象を意味することになる。この直観されている純粹な表象としての空間とこれを直観する働きとの関係は、ハイデガーの言葉を用いて次のように語ることもできよう。

「……空間を表象することは一個の唯一なる個別者 (ein einziges Einzelnes) を直接に表象することであり、換言すれば「それを」直観することである。……空間は、純粹に直観することの中で直観されているものである」。

われわれは、今、空間概念の「形而上学的解明」の成果を、空間という、純粹直観の働きの中で直観されているア・プリアリな純粹表象の発見として捉えている。しかし、これではまだ、空間に即して、対象認識のためのア・プリアリな純粹直観の働き、つまり、認識の対象が与えられるに際しその対象を規定する直観の純粹な「形式」を把握したことにはならない。それどころか、「形而上学的解明」の成果に対する現在のわれわれの理解ですら、テキスト解釈のための一つの仮定にもとづいて獲得されているということを忘れてはならない。従って、次に、テキスト解釈の歩みを一歩進めるといふより、むしろ、テキストに対する現在の理解を確保するための作業に取り組みたい。——カントが空間を「純粹直観」と呼ぶ時、実際彼は、空間を直観されている純粹な表象と考えているのであろうか。すなわち、空間を直観の働きが適中する純粹な「対象」と考えているのであろうか。

### 五、「対象」としての空間

前節冒頭近くでの引用箇所において、「……たった一つの対象をおしてのみ与えられうる表象は直観である」と述べられていた。ここで「たった一つの対象」と呼ばれているのは、「本質的に唯一」なる時間のことである。しかし、時間にせよ空間にせよ、「本質的に唯一」なるものとしてのそれが「対象」と呼ばれる時すでに一つの問題が存している。そのような空間や時間が、はたして「対象」となることができるのかという問題である。

空間が何らかの仕方でも思索の「対象」にならなければ、空間について、それが「本質的に唯一」であるとか「無限の……大きさ」で

あるとか積極的に述定する空間論は成立しえない。しかしその際、その空間論が、「超越論的」な思索の中で、空間を対象認識のためのア・プリアリな表象として解明しなければならぬ限り、その思索に対して与えられる空間は、さまざまな対象認識において捉えられる対象と等しい意味において「対象」であることはできない。その空間は、経験的直観の対象、つまり「現象」ではありえない。次に引用する二つの箇所は共にそのことを述べている。

「実体をもたない直観の単なる形式は、それ自体としてはいかなる対象でもなく、対象(現象としての)の単に形式的な条件である。例えば純粹空間と純粹時間がそれであって、これらは、直観するための形式としては確かに何か或るものであるが、しかしそれ自身は直観されるいかなる対象でもない(構想された存在者(ens imaginarium)もなし)」。①

「空間は、……外的に直観されうるようないかなる現実的对象でもない」。②  
共に、「個別的」で「唯一なる」ものであるが、空間論で主題化されている空間は、経験的直観の対象とは異なる。しかしそれでも、その空間が、空間論において、「哲学すること」すなわち「論弁的に思索すること」の主題(Gegenstand)となる限り、それは哲学する意識に対して何らかの仕方でも「対象」として与えられていなければならない。空間と時間についてカントは、それらを「ア・プリアリに、すなわち一切の現実的知覚に先立って認識すること」が可能であると言う。③しかし、その空間や時間が認識されるべき「対象」として与えられるのはどのようにしてなのか。

カントの晩年の遺稿『オプス・ポストゥムム』④の中に次の記述が見られる。



「空間と時間は、知覚（意識をともなる経験的表象）の対象ではなく、純粹直観（ア・プリアリナ）の対象である。空間と時間は物自体（自体的存在者）ではない、すなわち何か表象の外に存在するようなものではない。空間と時間は、主観に、つまりその活動としての主観に所属するものであり、これによって主観は自己自身を定立する。すなわち、自己自身を自己の表象の対象とする」。

ここでカントは、はっきりと、空間と時間は「純粹直観（ア・プリアリナ）の対象」であると述べている。前節で、空間を、純粹直観の働きの中で直観されているア・プリアリナ純粹表象と捉える解釈を提示したが、今、この解釈が、空間を「純粹直観……の対象」であるとするカントの記述によって支持されているのである。空間は、「純粹直観……の対象」であることよってはじめ、空間論の主題となることができ、「哲学すること」に対してその「対象」として与えられることができる。カントは、空間論において思索の「対象」として与えられている空間を、「純粹直観……の対象」であるとみなしているが故に、「本質的に唯一」という空間の性格から空間の直観性（直観されているものであるという性格）へとただちに推理することができたのである。

## 六、「直観」・「概念」・「理念」

空間が「論弁的概念、あるいは……一般的概念」ではなく「直観」であることを示す論証を含む箇所（の）の標題が、「この概念（空間概念、という意味）の形而上学的説明」とされているのは興味深い。空間が「概念」と呼ばれているのである。他にも、その「形而上学的説明」の中の四つの論証に先立つ前置きの部分において、「われわれ

は、まず最初に、空間の概念を解明したいと思う」と述べられているばかりでなく、空間が「直観」であることを示した他ならぬ「形而上学的説明」の直後に、「空間の概念の超越論的説明」という標題を付された項が配されている。

「形而上学的説明」の第三及び第四論証が、空間は「論弁的概念、あるいは……一般的概念」ではないと論証する以上、空間を「概念」と呼ぶのは不都合であると考えて、「概念」を「表象」と読み変えるのが適当であろうとする解釈者たちがいる。確かに空間は四つの論証の中で「表象」と呼ばれることもある。そして、より一般的な術語である「表象」という語を用いることはそれ自身誤りではないし、このことよって、空間を「論弁的概念、あるいは……一般的概念」ではなく「直観」であるとすると第三及び第四論証の記述と矛盾するかのように見える呼称を避けることができるという利点が存するようにも思える。しかし、本当にこれは利点であろうか。むしろ、より一般的な「表象」へと読み変えることよって、カントが空間を「概念」と呼ぶ時、「概念」という語に託したかもしれない意味の探究がとざされ、その意味が見のがされてしまうことになるのではないだろうか。とはいえ、たとえカントが「概念」という語に何らかの意味を託しているにしても、その意味は、空間が「概念」ではないと言われる際の「概念」という語の意味とは異なるものでなければならぬ。すなわち、カントが空間を「概念」と呼ぶ時、その「概念」は、「論弁的概念、あるいは……一般的概念」を意味することはありえない。否、そればかりでなく、第三及び第四論証で述べられる「直観」であるという空間の性格と矛盾するものでもありえない。

本稿第四節での引用箇所の一つにおいて、「……空間の概念（con-

ceptus spatii) は、純粹直観 (intuitus purus) である」と述べられていた。<sup>(88)</sup> この言葉からもうかがえるように、空間には概念性と直観性とが共に所属しているのである。その意味においては、空間に關して、「直観」か「概念」かの二者択一は成立しない。対象認識の場合、その認識において概念性と直観性の二つのモメントが相互に区別されつつ共に所属するというのが、『純粹理性批判』におけるカントの思索の成果であると言えよう。

「……概念と直観とはすべてのわれわれの認識のエレメントを形成する。それ故、何らかの仕方でおのれに対応する直観を欠く概念も、概念を欠く直観も、共に認識を与えることはできない」。<sup>(89)</sup>

「内容を欠く思想は空虚であり、概念を欠く直観は盲目である。」<sup>(90)</sup> しかし、対象認識に対するこのような捉え方自体が、「直観」の性格と「概念」の性格との区別、及び各々の性格の認められる各々の表象の発見、そしてそのように発見された表象に即しての各々の能力の働きの発見、更にそれらの働きの統合の仕方の説明、などの作業を介してはじめて基礎づけられるものなのである。ところが、今、われわれは、対象認識における「直観」と「概念」の区別と統合の論理を切り開く作業の端緒、つまりカントの感性論において、空間について、直観性と概念性の共属が語られているという事態を前にしているのである。少なくとも、空間が「概念」と呼ばれる時、この「概念」は、対象認識を形成するエレメントの一つである「概念」とは異なるものであり、かえって対象認識を形成する他のエレメントである「直観」と一体を成しているものなのである。空間の概念性の意味の確定は次節に委ね、本節では更に、同じく空間について、それが「理念」と呼ばれることさえあるのだという事実を指摘しておきたい。

カントは、『自然科学の形而上学的原理』<sup>(91)</sup> において、「純粹空間、あるいはまた絶対的空間」すなわち「あらゆる運動が究極においてはそこで考えられなければならない空間」について、次のように述べている。

「……絶対的空間は、それ自体としては、無であり、いかなる客体でもない。……絶対的空間を現実的な物だとすることは、その内に包含されているそれぞれの経験的空間がそれと比較されるところの、何らか或る空間という論理的、一般性を、現実的領域の物理的、一般性と取りちがえることであり、理性の理念を誤解することである」。<sup>(92)</sup>

更に、二箇所引用しよう。

「それ〔絶対的空間、という意味〕は経験の対象ではありえない。質料を欠く空間は知覚の対象ではないからである。それにもかかわらず、それは必然的な理性概念である。従って、それは単なる理念以上のものではない」。<sup>(93)</sup>

「絶対的空間は、……すべての運動をその内において単に相對的なものとして考察するための規則として役立つべき理念として不可欠である」。<sup>(94)</sup>

以上見てきたように、カントは空間を「概念」と、あるいはまた「理念」と呼ぶことがある。われわれは、「形而上学的解明」の結論として空間が「純粹直観」であると語られる時、「純粹直観」とは純粹に直観されている純粋な表象という意味において理解されるべきであるという点までテキスト解釈を進めてきた。それでは、純粹に直観されている純粋な表象である空間は、いかなる意味において更に「概念」とあるいはまた「理念」と称されるのか。このような問題の存することを念頭に置いて、次節で、空間という「純粹

直観」に即してア・プリオリな純粹直観の働きを把握するための前提となる作業に取り組みたい。空間が「概念」とか「理念」とか称される理由も、その作業によって明らかになるであろう。

## 七、悟性の介入

空間に即して、ア・プリオリな純粹直観の働きを捉えようとする時、われわれは、空間の成立に際して悟性の働きが介入していることに注目しなければならない。本稿第一節で、感性論を読むだけでは感性に固有の働きをその純然たる姿において把握することはできないと述べたが、それは、感性論で考察されている空間が悟性の働きを俟ってはじめて成立するものだからである。従って、ア・プリオリな純粹直観の働きが空間に即して把握されるにしても、その働きは、その空間に即しつつ、しかし同時に悟性の働きとは区別されてはじめて、その純然たる姿において把握されるということになるであろう。

ともあれ、空間の成立に際しての悟性の働きに関するカントの記述を見てみよう。

「対象として表象された空間（実際に幾何学で必要とされるような）は、直観の単なる形式以上のものを含む。すなわち、感性の形式に従って与えられた多様なものを一つの直観的表象へと総括することを含む。従って、直観の形式は単に多様なものを与えるのみであるが、形式的直観は表象の統一を与えるということになる。私は感性論では、この統一を単に感性に算入しておいたが、それは、この統一が、或る総合を、すなわち感官には所屬しないが、しかしそれによって空間と時間についてのすべての概念がはじめて可能とな

るような総合を前提するとはいへ、それでもすべての概念に先行する (vor allem Begriffe vorhergehen) ということをただ言いたいがためであった。というのは、(悟性が感性を規定することによる) その総合をとおして、空間あるいは時間が直観としてはじめて与えられるのである故、このア・プリオリな直観の統一は、空間と時間(96)に所屬するのであって、悟性の概念には所屬しないからである」。

カントによれば、空間と時間が「直観」として成立するためには、悟性による「総合」が必要となる。それ故、感性論で「純粹直観」として示された空間も、単に感性のみに由来する表象ではなく、「感性と悟性との協働(97)」に帰せられるべき表象であるということになる。しかし、空間や時間を「直観」として成立せしめる際に悟性による「総合」が必要であるとはいへ、この「総合」をとおして成立した「直観」の「統一」は「すべての概念に先行する」と語られている。更にまた、「悟性の概念には所屬しない」とも語られている。ところで、「総合」をとおして実現する「統一」であって、しかも「悟性の概念には所屬せず」「すべての概念に先行する」と語られる「統一」とはどのようなものであろうか。

「総合」という悟性の働きがすべて、対象認識のためのエレメントである純粹悟性概念にもとづくものであるとするなら、右の引用箇所にあった「それによって空間と時間についてのすべての概念がはじめて可能となるような総合」も、そのような純粹悟性概念にもとづく「総合」であるということになる。そしてその場合には、その「総合」をとおして実現する「統一」は、「悟性の概念」に所屬することとなり、「すべての概念に先行する」とは語ることでできないものとなる。そればかりではない。感性論で「純粹直観」とし

て示された空間が、対象認識のためのエレメントである純粹悟性概念にもとづく「総合」をおしてはじめて成立するのであるとすれば、空間概念の「形而上学的解明」で明らかにされた空間の性格の一つ、つまりその全体が部分に「先行」し、諸部分はその全体の「内」でのみ可能であるという性格、一言で語るなら「本質的に唯一」という性格（空間のこの性格は無限性という空間の他の性格を内含する）は、否定されるであろう。なぜなら、その場合には、「純粹直観」としての空間についても、「直観の公理」と名づけられた「原則」すなわち「すべて、直観は外延量である」という「原理」が妥当することになるが、まさしく「外延量」とはカントによれば「諸部分の表象がそこでは全体の表象を可能にする（従ってまた、諸部分の表象が必然的に全体の表象に先行する）ような量」である、からだ。すなわち、その場合には、特定の大きさをもつかない空間の限界をも越えて彼方へと更に広がる、「本質的に唯一」なる「無限の……大きさ」であると語られた空間でさえ、諸々の部分空間の「合成 (Zusammensetzung)」<sup>(102)</sup>によって成立する「外延量」であるということになるからである。こうして、もはや空間は、本来的には、「本質的に唯一」という性格を所有していないということになる。

従って、空間が「直観」として成立する際に必要であるとされた悟性による「総合」を、対象認識のためのエレメントである純粹悟性概念にもとづく「総合」であるとする解釈は、まず第一に、その「総合」をおして実現する「統一」を「悟性の概念」に所屬せしめ、従ってそれを「すべての概念に先行する」ものとしては捉えることができなくなるといふ点において、第二に、「本質的に唯一」

という性格の有無をめぐり、感性論の空間論と「対立」するあるいは「矛盾」する空間論を分析論に見ることになるという点において、カントのテキストから遊離するように思えるのである。<sup>(104)</sup>

しかしながら、元来カントの空間論は、対象認識のためのア・プリオリな能力（「純粹理性」）の解明と定立をめざす思索の一環を成すものである。従って、その思索は、理性の「自己認識」として遂行されているはずである。ところが、「直観の公理」と名づけられた「原則」は、「カテゴリーの客観的使用の諸規則」の一つである。すなわち、対象認識の獲得に向けて純粹悟性概念が用いられる際の「規則」である。それ故、「すべての直観は外延量である」という「原理」は、対象認識にとっては絶対的な妥当性を所有するとしても、理性の「自己認識」に所屬する思索である「形而上学的解明」において主題（「対象」）化され、そこで「純粹直観」として示された空間については、妥当性をもたない。この空間に具わる「多様なものの総括」・「統一」は、悟性による「総合」を前提するとはいえず、この「総合」は、対象認識のためのエレメントである純粹悟性概念にもとづくものではないし、「直観の公理」と名づけられた「原則」にもとづくものでもない。

では、悟性による「総合」を前提するにもかわららず「悟性の概念には所屬せず」「すべての概念に先行する」と語られた「統一」とは何か。これを明らかにするため、カントの次の記述を引用したい。

「結合のすべての概念にア・プリオリに先行する (a priori vor allen Begriffen der Verbindung vorhergehen) この統一は、あの単一性のカテゴリー……のようなものではない。というのは、

すべてのカテゴリーは、判断における論理的機能に根拠づけられて  
いるが、しかし判断においてはすでに結合が、従って与えられた諸  
概念の統一が思惟されているからである。それ故カテゴリーはすで  
に結合を前提している。それ故、われわれは、この統一(質的統一  
としての……)をもっと高次のものにおいて求めなければならな  
い。<sup>(108)</sup>

この引用箇所で「結合のすべての概念にア・プリアリに先行す  
る」と語られる「統一」とは、「純粹統覚」<sup>(107)</sup>ないし「根源的統覚」<sup>(108)</sup>  
の「統一」、あるいは同じことであるが「自己意識」<sup>(109)</sup>の「統一」の  
ことである。確かに、この「統一」は、それ自身としては「結合の  
すべての概念にア・プリアリに先行する」。しかし、この「統一」  
も、対象認識において機能する純粹悟性概念や、「カテゴリーの客  
観的使用の諸規則」である「原則」を介して發揮される限りでは、  
すなわち対象認識のための「原理」・「源泉」として存する限りで  
は、「悟性の概念」に所属し、「すべての概念に先行する」とは語  
りえぬものである。それ故、統覚の「統一」は、別の仕方、發揮さ  
れ別の仕方、存在することよってのみ、「悟性の概念には所属せ  
ず」「すべての概念に先行する」と語られるものであることができ  
る。別の仕方、とは、すなわち、統覚の「統一」が、理性の「自己  
認識」のコンテクストにおいて發揮される場合のことである。

カントによれば、統覚は、「私は、思惟する」という表象として、  
「すべての私の表象にもなり、<sup>(110)</sup>ことができるのでなければならな  
い」。このことは、「自己認識」のコンテクストにおいても妥当す  
る。すなわち、統覚・「私は思惟する」は、対象認識のためのア・  
プリアリな表象の「原理」・「源泉」の解明において、例えば空間、

時間、純粹悟性概念などの表象を主題(「対象」)化する際も、その  
表象が「私の表象」<sup>(111)</sup>である以上は、その表象に「ともなう」。そし  
て、この統覚・「私は思惟する」は、これが「ともなう」表象の全  
体を「統一」する。空間概念の「形而上学的解明」で「純粹直観」  
であると語られた空間も、この空間を「私の表象」として意識しつ  
つ考察する統覚によって「統一」されているのである。つまり、  
「純粹直観」としての空間に具わる「多様なものの総括」・「統一」  
は、「自己認識」のコンテクストにおいて發揮される統覚の働きに  
由来するものである。<sup>(112)</sup>そして、このように「自己認識」のコン  
テクストにおいて發揮される場合に限り、統覚、すなわち悟性は、  
「悟性の概念には所属せず」「すべての概念に先行する」と語られ  
る「統一」を産み出すことができる。この場合に限り、統覚の「統  
一」する働きが、対象認識のためのエレメントである純粹悟性概念  
や、「カテゴリーの客観的使用の諸規則」である「原則」を介さず  
に發揮されるからである。

しかし、統覚は、これが「ともなう」表象の全体を「統一」する  
とはいえ、ここに成立する「統一」の在り方は、統覚のもとに「統  
一」されている表象の種類に応じて異なる。空間の場合、その「統  
一」は、「論弁的概念、あるいは……一般的概念」には認められな  
い。在り方において、すなわち「本質的に唯一」という在り方にお  
いて与えられている。それ故、「本質的に唯一」という空間の性格  
は、空間を意識する統覚に全面的に依存する性格ではない。この性  
格の中には、統覚によって「統一」されている表象そのものの性格  
が同時に表現されているのである。

前節で見たように、カントは、「純粹直観」としての空間を「概

念」とか「理念」とか称することがある。一見「締まりのない」<sup>(118)</sup>このような語用にもそれなりの理由がある。すなわち、空間の呼称の多様性は、「純粹直観」としての空間が、空間を意識する統覚すなわち悟性に由来する「統一」をすでに所有しているということにもとづくのである。「概念」という呼称について、グラウプナーは、「△概念▽という語は、確かに、この表象〔空間及び時間の表象、という意味〕の本性、すなわちこの表象は純粹悟性によって表象されているということを一層正確に表示する」と述べている。更にまた、「純粹直観」としての空間は、統覚に由来する「統一」を所有する限り、「理念」と称されることもできるのであろう。というのは、この際、統覚に由来する「統一」は、經驗的直観の対象にはなく、純粹に直観されている純粹な表象に所属し、その限りでは、この「統一」は、經驗的直観の対象を超越する純粹表象に即して見いだされるものであるからである。

さて、純粹に直観されている純粹な表象としての空間には、すでに悟性の働きの介入していることが明らかになった。空間論は、空間を意識する統覚すなわち悟性なしには不可能であるが、この統覚すなわち悟性が、空間を意識することによってその空間に「多様なものの総括」と「統一」を与えている。空間とは、純粹に直観されている純粹な表象であるが、同時に空間はそのような表象として意識されることの中で「総括」され、「統一」を付与されているのである。従って、純粹直観の働きの空間に即して把握されるにしても、その働きの、空間の成立に際して介入している悟性の働きのから区別されてはじめて、その純然たる姿において把握されるということになる。

## 八、純粹直観の働き

### ——「共観(Synopsis)」——

110

純粹直観の働きについてのカントの思想を見ることにしよう。空間概念の「形而上学的解明」で主題〔対象〕化され「純粹直観」であると語られた空間、すなわち純粹に直観されている純粹な表象としての空間は、カントによれば、二種の働きによって成立したものである。前節で引用した箇所の一部を、ここに再び引用したい。

「……対象として表象された空間は、直観の単なる形式以上のものを含む。すなわち、感性の形式に従って与えられた多様なものを一つの直観的表象へと総括することを含む。従って、直観の形式は単に多様なものを与えるのみである……ということになる」<sup>(119)</sup>。

純粹に直観されている純粹な表象としての空間が、これを意識する悟性によって「総括」され「統一」されていることは、すでに述べた。右の引用箇所では、その悟性による「総括」と「統一」を容許することによって自ら空間という形を取る「多様なもの」が、「直観の形式」によって与えられたものであると述べられている。「直観の形式」とは、認識の対象を前にしてこの対象に直接的に関係しつこの対象を規定する「形式」、すなわち純粹直観の働きのことである。更にまた、右の引用箇所では、空間は、「総括」と「統一」を受容する「多様なもの」をその身に具えるばかりでなく、この「多様なもの」を与える「直観の単なる形式」、すなわち純然たる姿における純粹直観の働きの「含む」と述べられている。カントは、純粹に直観されている純粹な表象としての空間に即して、その

表象が「含む」純粹直観の働きを、その表象が同時に「含む」悟性の働きとの区別のもとに洞察し、これを「直観の単なる形式」と呼んでいるのである。「単に多様なものを与えるのみ」と記されるこの純粹直観の働きは、『純粹理性批判』第一版では、「共観 (Synopsis)」と呼ばれていた。この術語の用いられている二つの箇所を見てみよう。

「……すべての経験の可能性の諸条件を含み、それ自身は心のいかなる他の能力からも導出されえない三つの根源的源泉（魂の素質あるいは能力）がある。それは、すなわち、感官、構想力、統覚である。これらのものにもとづいて、(1) 感官によるア・プリアリな多様なものの共観 (Synopsis)、(2) 構想力によるこの多様なものの総合、最後に、(3) 根源的統覚によるこの総合の統一、がある」。

ここで、「ア・プリアリな多様なものの共観」という働きが、他の能力へと還元されえないそれ自身一つの「根源的」な能力である「感官」の働きとして語られている。この働きは、「共観 (Synopsis)」と表現されているが、われわれは、この働きを、「ア・プリアリな多様なもの」をおのれのまなざしのもとに一括して眺める自覚的な働きと解してはならない。「共観」とは、「構想力」や「統覚」とは異なる一つの「根源的」な能力の働き、すなわちそれ自身としては無意識的、盲目的、<sup>(11)</sup>「感官」の働きだからである。むしろ、「ア・プリアリな多様なものの共観」とは、「単に多様なものを……」、「これを眺めることによってこれを「総括」し「統一」するような他の「根源的」な能力へと「……与えるのみ」と記されたあの「直観の形式」<sup>(18)</sup>のことである。そして、純粹に直観されている純粹な表象としての空間は、「直観の形式」すなわち純粹直観の

働きを「含む」<sup>(19)</sup>のであるから、「共観」の働きも、空間に即して、しかもその「ア・プリアリな多様なもの」に即して、現に發揮されているということになるだろう。「共観」の働きについてのこのような解釈は、カントの次の記述によって裏づけられる。

「……私が感官に、感官はおのれの直観において多様性を含むが故に、共観 (Synopsis) を添えるなら、この共観にはいつでも総合が対応する。受容性は自発性と結合してのみ認識を可能ならしめることができる」。

カントは、ここで、「感官はおのれの直観において多様性を含む」という理由にもとづいて、その「感官」に「共観」の働きを所屬させ、これを「総合」の働きに相對させている。つまりカントは、直観に具わる「多様性」に即して現に發揮されている「感官」の働きを洞察し、これを「自発性」の性格をもつ「総合」の働きに相對させて「共観」と呼んでいるのである。

では、空間に即して、しかもそれに具わる多様に即して洞察される働きとは何か。すなわち、「共観」、「直観の形式」、純粹直観の働きとは何か。それは、それぞれそれ自身としては互いに異質なさまざまな諸感覚を、われわれの外部に並存する同種的な直観の多様へと変貌させる働きである。触発によって生ぜしめられる多種多様な感覚は「われわれの主観の変化」であるにすぎず、「諸物の性質」<sup>(12)</sup>ではない。<sup>(13)</sup>純粹直観の働きとは、それら諸感覚を同種的な直観の多様へと変貌させることによって、認識対象の形成に寄与する働きである。つまり、認識対象に属しこの対象を成立させている要素の一つである多様をわれわれの外部に同種的なものとして並存させている働きなのである。そして、純粹直観の働きは、このような仕方

認識の対象に直接的に関係しつつこの対象を規定するが故に、「直観の形式」とも称されるのである。<sup>(124)</sup>

空間概念の「形而上学的解明」の成果として、純粹に直観されている純粹な表象という意味での「純粹直観」であると語られた空間には、悟性の働きがすでに介入しているために、悟性の働きについての論理である分析論（『純粹理性批判』原理論の第二部門に所屬）に先立つ感性論（『純粹理性批判』原理論の第一部門）では、その空間に即して、純粹直観の働きをその純然たる姿において明示することは不可能であった。しかし感性論の末尾に、感性論の成果の要約として「ア・プリオリな純粹直観、すなわち空間と時間」の発見が語られている限り、その空間と時間に即して、ア・プリオリな純粹直観の働きの洞察されていなければならない。この洞察がなければ、感性論は、感性というア・プリオリな能力を定立する論理として成立しえず、それ故『純粹理性批判』原理論に所屬できないことになるからである。「形而上学的解明」に携わるカントがすでにそのような洞察を所有していたとわれわれに確信させる記述を引用しよう。空間概念の「形而上学的解明」の四つの論証の中の第一論証において、次のように述べられている。

「……或る種の諸感覚が私の外部の或るものへ……関係づけられるためには、同じく、私がそれら諸感覚をたがいの外部にまたたがいの隣に存するものとして、従って単に異なっているばかりでなく異なった場所にあるものとして表象しうるためには、空間の表象がすでにその根底に存しなければならぬ」<sup>(125)</sup>。

カントは、四つの論証を介して「純粹直観」であると語ることになる空間に即して、純粹直観の働き、すなわちそれ自身としては

「われわれの主観の変化」であるにすぎない多種多様な感覚をわれわれの外部に並存する同種的な直観の多様へと変貌させる働きを洞察していたのである。この洞察にもとづいてこそ、カントは、この働きにおいて發揮される「根源的」な能力として感性を定立することができたのである。

注

著者名を記さぬものはすべてカント。『純粹理性批判』の引用・参照は、書名は記さず、一七八一年第一版をA、一七八七年第二版をBで示し、頁数を添える。カントの他の著作等の引用・参照は、アカデミー版カント全集、[AAと略記]により、ローマ数字で巻数を、アラビア数字でその巻の頁数を記す。

- (1) A19-49, B33-73.
- (2) vgl. A11, B24-25.
- (3) AXI.
- (4) 「超越論的」という術語の定義 (A11-12, B25) を参照せよ。
- (5) A12, B26.
- (6) vgl. A15-16, B29-30.
- (7) B73. この段落は『純粹理性批判』第二版で新たに追加されたものである。以下、『純粹理性批判』については、特に断わらない限り、第二版に即して論述を進める。
- (8) Ibid.
- (9) 先の引用箇所——注(8)——では、空間及び時間が「ア・プリオリな総合的諸命題」の可能性を支える条件の一つとして捉えられているが、これは、空間及び時間が対象認識成立のために不可欠なア・プリオリな表象として捉えられるのと同じことを意味する。実際カントは、『実践理性批判』において、『純粹理性批判』の「課題」を「い



- かたして純粹理性は客体をア・プリオリに認識するものとがわかれか」と定式化してゐる。また「総合的 (synthetisch)」を「実在的 (real)」と同し視するものとがわかれ (Kritik der praktischen Vernunft, 1788, AAV, S. 44-45 u. S. 111.)。更に『判断力批判』に於て「objektiv (synthetisch) urtheilen」と記して「客観的」と「総合的」を等視してゐる (Kritik der Urtheilskraft, 1790, AAV, S. 401.)。
- (10) B37 u. B46.
- (11) 主として空間概念に即してはあゝるが、本稿第二節がこの「問題」を取り組む。
- (12) 本稿第四・第五・第六節がこの「事実」に言及する。
- (13) 本稿第七節がこの「事情」が明らかたなる。
- (14) この「難解を」たつとつは、拙稿「自己認識のメタリマ——超越論的統覚に関するカントの若干の記述の考察——」『東洋大学紀要・教養課程篇』第二十号、昭和五十六年三月、を参照されたい。
- (15) 以下、空間論に即して論述を進めよう。「形而上学的解明」の論証番号は、『純粹理性批判』第二版における論証の順序を示す。
- (16) A23, B37.
- (17) 但し、「四の論証」における思索の成果を先取りなうして示すの記述なら、空間概念の「形而上学的解明」の項に先立ち項とせよとせよ。また「形而上学的解明」の中の前置詞の部分になうとせよとせよとせよ。
- (18) vgl. z. B. Hans Vaihinger, Kommentar zu Kants Kritik der reinen Vernunft, Neudruck der 2. Auflage Stuttgart 1922, 1970 [以下「Vai-Kommentar」略記], Bd. 2, S. 261-263; H. J. Paton, Kants Metaphysics of Experience, fifth impression 1970, vol. 1, p. 109; Martin Heidegger, Phänomenologische Interpretation von Kants Kritik der reinen Vernunft, Ges- amtausgabe Bd. 25, 1977 [以下「Interpretation」略記], S. 114-121; Heinz Jansohn, Kants Lehre von der Subjektivität, 1969, S. 145. 尚、久保元彦氏は「形式としての空間」『人文學報』(東京都立大学文学部) 第百二十二号、昭和五十二年三月、に於て「四の論証」のうち「まず最初の二つの論証が直観の形式としての空間に於て述べて、次に後の二つの論証が純粹直観としての空間に於て述べて」(十一頁)と述べてゐる。しかし、彼のこの解釈の「形式性がア・プリオリの根拠を成す」(十二頁)とする限りの本稿本文に述べた「通常」の「解釈」の例外ではない。
- (19) A23-24, B38-39.
- (20) A24-25, B39.
- (21) B40.
- (22) vgl. A30-32, B46-48.
- (23) vgl. A15-16, B29-30.
- (24) 「何れもこの空間は活動的なものではないなら (nichts Tätiges)」、まことに感覚に反応して働き出す作用ではないなら (nichts empfindungsmäßige Einwirkendes)」と、〈マートン〉語の「Martin Heidegger, Interpretation, S. 125.」。
- (25) B41. カントは「形式」には「規定する働きを意味する総體」として用ゐる (vgl. A266, B322.)。vgl. auch Martin Heidegger, Interpretation, S. 124-126.
- (26) B41.
- (27) vgl. B1-2 u. B3-4, vgl. auch A1-2.
- (28) ア・プリオリ性や直観性の論証はいつかは、それが成功してゐるか否か、またどのような意味でのア・プリオリ性と直観性が示されようのかが問題となる。筆者は、これらの問題を、特に直観性の論証に於て、本稿第三節以下に考察する。
- (29) B1.

- (30) 「形而上学的解明」の第一及び第二論証を「直観の形式としての空間について述べる」ものと解釈する前掲久保論文一注(18)を参照せよ。空間が所有する、認識対象を規定する働き解明に寄与する研究として捉えかえすことが可能。
- (31) A24, B38-39.
- (32) 「外的現象」としての空間のこの必然性を、フアイエンガーは、「相対的必然性」と呼ぶ。そして、この必然性を、空間表象そのものの「絶対的必然性」、つまり「われわれの意識と不可分離的に結びつき、われわれの自我と結合してゐる」が故に「取り除いて考えることが出来ない」(Nicht-Hinweg-Denkbarkeit)と云う意味での必然性と区別した上で、前者を後者からの帰結と解釈する。但し、彼の解釈に対しては、ヤンゾーンや久保元彦氏によって鋭い批判が投げかけられている。テキストでは彼の言う「絶対的必然性」なるものには言及されていない。「相対的必然性」と彼が呼ぶ必然性のみが主張されている。その批判の要諦は、vgl. Hans Vaihinger, Kommentar, Bd. 2, S. 186-187 u. S. 193. vgl. auch Heinz Jansohn, Kants Lehre von der Subjektivität, 1969, S. 146-149. 更に、前掲久保論文の三十二頁以下を参照せよ。
- (33) A23-24, B38-39.
- (34) A25, B39.
- (35) *ibid.*.
- (36) *ibid.*.
- (37) A438, B466. vgl. B201Anm. このような性格を有する空間は、カントが記した「反省」の「*quantum*」とも呼ばれている。「空間を *quantum* であるが、*compositum* ではない。空間はその諸部分が定立されることによって生じるのではなく、諸部分は空間そのものの可能であるから」(Kants handschriftlicher Nachlaß, Nr. 4425, AAXVII S. 541.)。
- (38) A25, B39.
- (39) Martin Heidegger, Interpretation, S. 117.
- (40) A24, B39.
- (41) Hans Vaihinger, Kommentar, Bd. 2, S. 220. この論証の簡潔な要約が見られる。
- (42) B40. 「自分の下」と「自分の内」は第四論証から借りた語句である。後述するように、第三論証における空間の唯一性の思想は、第四論証における空間の無限性の思想を含蓄するため、第三論証の説明として、第四論証で用いられている語句が役立つ場合がある。
- (43) 例えば、Logik, A1IX, S. 35. 「諸キルターール」と「諸構成部分」が等視されている。その箇所では、「徳の概念」の内に含まれる「諸メルクマール」として「自由の概念」「規則への忠実さ(義務)の概念」などが挙げられている。
- (44) A25, B39.
- (45) *ibid.*.
- (46) *ibid.*.
- (47) *ibid.*.
- (48) vgl. B2-3; A20, B34; A42, B59-60.
- (49) vgl. Hans Vaihinger, Kommentar, Bd. 2, S. 221-222.
- (50) B39.
- (51) B39-40.
- (52) B40.
- (53) A31-32, B47.
- (54) 「時間」の自己認識のコメントにおいては「対象」となる。本稿第五節を参照せよ。
- (55) vgl. A32, B47-48. 参照箇所ではカントは、「時間のすべての規定された大きなはその根底に存する唯一なる時間の諸制限によってのみ可能である」と述べている。



- (33) B40.
- (34) vgl. auch A156, B195. 尚『純粹理性批判』以外のカントの著作に於ては、空間を「概念」に於ては、箇所を指摘せらる。
- vgl. z. B. De mundi sensibilibs atque intelligibilibs forma et principijs, 1770. AAI, S. 397, S. 402, S. 404, S. 405, S. 406; Prolegomena zu einer jeden künftigen Metaphysik, die als Wissenschaft wird auftreten können, 1783, AAI, S. 323.
- (35) cf. H. J. Paton, Kant's Metaphysic of Experience, fifth impression 1970, vol. 1, p. 108 note 1. 他に、岩波文庫『カント「純粹理性批判」の研究』(岩波書局、一九六五年)五十九頁註、重松『カントと形而上学の検証』(法政大学出版局、一九八四年)九十八頁註(一)、『三十三頁』(二)、『参照せよ』。vgl. auch, Hans Vaihinger, Kommentar, Bd. 2, S. 155-157.
- (36) A23-24, B38-40.
- (37) vgl. A320, B376-377.
- (38) 先の「用概念」註(5)一を参照せよ。
- (39) A50, B74.
- (40) A51, B75.
- (41) Metaphysische Anfangsgründe der Naturwissenschaft, 1786, AAI, S. 465-566.
- (42) ibid., AAI, S. 480.
- (43) ibid., AAI, S. 481-482.
- (44) ibid., AAI, S. 559.
- (45) ibid., AAI, S. 560. vgl. ibid., AAI, S. 521. vgl. auch Heinz Heimsoeth, Studien zur Philosophie Immanuel Kants I, Kantstudien Ergänzungshefte 71, zweite, durchgesehene Auflage 1971, S. 120.
- (46) B160-161Ann..
- (47) Hans Vaihinger, Kommentar, Bd. 2, S. 229. ノイマンガーは、「感性論のカントは、純粹(絶対的、無限)な空間の表象を単なる感性それ自身に帰してゐたが、これに対して分析論では、同じ表象を感性と知性の協働に帰してゐる」と述べて、この点にカントの思想の「不整合(Inconsequenz)」を見ている。本稿は、カントの思想を整合的に解釈しようとするのであつた。
- (48) 本稿第三節を参照せよ。
- (49) A161, B200.
- (50) B202.
- (51) A162, B203.
- (52) B201Ann..
- (53) 「超越論的分析論」(A64-292, B89-349)のJ.V.
- (54) 重松の「前掲書」百六十五頁以下を参照せよ。そのほか、『純粹理性批判』に見られる二つの対立し合う空間論がそれぞれ「制限・所与論」・「合成・獲得説」と名づけられ、それぞれについてかつまた両者の關係について詳細に論じられてゐる。
- (55) A161, B200.
- (56) B131.
- (57) B132.
- (58) ibid..
- (59) ibid..
- (60) ibid..
- (61) B131.
- (62) B132.
- (63) カントは「図像」の「はたはた」『純粹直観』空間の空間の「はたはた」の「はたはた」。「空間は……純粹直観である。空間は……主観の統一の故に、この個別的な表象の「はたはた」(Kant's handschriftlicher Nachlaß, Nr. 4673, AAXVII, S. 638.)」
- (64) Hans Vaihinger, Kommentar, Bd. 2, S. 156, S. 157.

- (111) Hans Graubner, *Form und Wesen, Kantstudien Ergänzungshefte* 104, 1972, S. 113. 近『同書』, 2. Teil A. *Form der Anschauung*——*Form der Erscheinung*“ (ibid., S. 93-202) の部分は、カントの感性論を扱うすべしとの研究によって極めて重要な先行研究である、と言えよう。
- (112) B160Amm.
- (116) A94.
- (117) vgl. A51, B75.
- (118) 先の引用箇所—注(115)—を参照せよ。
- (119) 先の引用箇所—注(115)—を参照せよ。
- (120) A97.
- (121) vgl. Hans Graubner, *Form und Wesen, Kantstudien Ergänzungshefte* 104, 1972, S. 175. vgl. auch ibid., S. 169-176.
- (121) A19-20, B34.
- (122) A29, B45.
- (124) 注(8)を参照せよ。
- (125) A23, B38. 引用箇所の詳細な分析が、前掲久保論文—注(8)を参照せよ—の第二・第三節に見られる。